

農業高校と地域連携

—農が持つ教育力とその可能性—

小松瑞季

本論文では、農業高校で行われている、産官学連携による地域連携事業に焦点を当て農業を学ぶ彼らが3年間で身に付ける力がなにかを明らかにすることを目的としている。本論文で取り上げる地域連携事業は山形県立庄内農業高等学校（以下、庄農）が行っている「庄農うどん大作戦！」（以下、うどん大作戦）である。2023年9月5日～7日にかけて現地調査を行い、うどん大作戦に関わっている各機関に聞き取り調査を行った。

第1章では「専門高校について」、第2章では「農業高校について」、第3章では「山形県立庄内農業高等学校の取り組み」に分け展開している。高校で行った調査については第3章でまとめ、終章で農業高校が持つ教育力とは何かを考察した。

2020年度全国にある高校は全日制・通信制・定時制合わせて、5,599校ある。生徒数は3,299,012人である。その中でも農業高校は303校、661,701人と、専門高校全体では工業・商業科について3番目の割合を占めている。

全国農業高等学校長協会では、日本の未来を担う人材育成のための「グローバル・アグリハイスクール宣言」を行い、「5つのミッション」と「8項目の行動計画」を策定している。農業高校を取り巻く環境は目まぐるしく変化しており、かつては農「を」学ぶ場所であったが農「から」学ぶ教育機関へと転換するタイミングを迎えている。

農業高校の学びで注目すべきは地域との結びつきが強いという点である。歴史的に見ても、農業高校とは地域との関わり合いがあってこそ成り立っている。そして、今日において全国で庄農のような「うどん大作戦」などの地域連携事業が活発に行われている。これらの活動の多くは「日本学校農業クラブ全国大会」で発表され、地域に還元することで社会的に評価を受ける場面が多い。このような取り組みは、文部科学省による「マイスター・ハイスクール事業制度」でより奨励され、今後もさらに発展していくと考えられる。

庄農で行った聞き取り調査に加え、地域連携事業を行うにあたって欠かすことができない行政・協力店舗にも調査を行うことでそれぞれの視点で活動に対する想いを伺った。各機関で調査を行うことで、地域連携事業を多角的に捉えることができた。

中学校を卒業した約8割の生徒が普通科高校に進学する中で、農業高校を選択した彼らは、間違いなく普通科高校とは比べ物にならない経験をする事ができ、身に付く力もどれも将来に繋がるものばかりであった。15～18歳という子どもと大人の狭間で過ごす3年間は、いかに多くの人と出会い、どのような経験をするかが重要である。農業高校で身に付けた力は、卒業して社会に出たときに気づかされるものばかりである。農業高校では無意識の成長によって、社会の持続的な発展を担う職業人を育成することを可能にしている。